

荒木恵美子さんのお話

五輪と平和

皆さんこんにちは。狛江市在住学生の荒木恵美子と申します。この度は、このような貴重な機会を頂き、とても光栄です。

私は、中学生の頃から様々な社会問題に関心を抱くようになり、最初は家族からいろいろ学んできました。そして家族に紹介してもらった学習の機会を積み重ねるなかで、多くの人と出会い、昨年は、核兵器禁止条約への批准を国に求めるため外務省を訪れたり、学術会議問題について仲間たちと首相官邸前でスピーチをするなど、自分に出来る行動を続けてきました。

今回は、東京オリンピック・パラリンピック開催を通して、私が学んできたこと、感じていることをお話しさせていただきます。

スポーツを頑張る人の姿に元気をもらったり、感動する経験は私もこれまでたくさんしてきました。一生懸命努力する人の姿には強く心を動かされます。ちなみに、私は大のボクシングファンでもあります。

コロナウィルスの拡大という問題が無ければ、57年ぶりに東京で開催されるオリンピックは、多くの人々の楽しみとなっていたことでしょう。しかし、誰も予想しえなかった、突然のコロナウィルス感染症が世界中で猛威を振るい、延期した昨年よりも感染者数が増加する中、国やIOCは、五輪開催はコロナの拡大に影

響しないという主張をし、私には、戸惑う人々を置き去りにしているとしか思えませんでした。

私は、何かがおかしいという違和感が膨れ上がり、色々学んでいく中で、自分の感じた違和感には現代のオリンピック固有の問題と、コロナ禍でオリンピックが開催されたことの問題が混在していることを知るに至りました。

まず、オリンピック固有の問題についてです。

現代オリンピックは1896年に初めて開催されました。創設者のクーベルタン男爵は、子孫繁栄にしか価値が置かれなかった女性の参加を認めず、「平等」からは程遠い思想の持ち主でした。その女性の参加については、経過の中で徐々に改善されてきましたが、今では「男性」「女性」とい



荒木さんのお話を聴く会場の皆さん

友人・知人視聴会(公民館ホール:狛江の放射能を測る会)にて

う枠組みでジェンダーの問題をどう取り扱うのかというテーマが浮き彫りとなっていており、今後整理していかなければならない問題の一つです。

その後「平和の祭典」として継続されてきたオリンピックですが、1980年代に入り、ロサンゼルスオリンピック以降、商業化が進み、オリンピックを放送する「放映権」の問題が大きくなりました。今回の東京大会が、真夏という酷暑の中での開催となったことや、真夜中に行われる競技があった背景には、放映権を持つアメリカのNBCという放送会社が、アメリカでのプロスポーツ大会と被らないように配慮があったということを知りました。これには、日本とアメリカの非対等といえる関係が影響しているのだと思います。また、IOCがNBCから莫大な放送権料を受け取るという利害関係があるらしいことも初めて知りました。

ボランティアに対して、スポンサー企業であるコカ・コーラ社以外の飲み物持参を原則禁止、他社製の飲み物の場合はラベルをはがすというルールがあるなど、限られた企業が利益を得ていることにも、とても驚きました。莫大な利益を得る企業がある一方で、過酷な練習を重ねてきた選手への対価が全体収入の僅か4.1%という不当な待遇も問題だと感じました。

オリンピックは、スポーツを通して、世界の平和を願い多様性を尊重していくという素晴らしい理念を持ちながら、一方でそれに伴うお金の動きが、大きな問題をはらんでいるということを私は初めて考えさせられました。

次に、コロナ禍における開催についてです。

菅首相は「国民の命と健康を守れなければオリンピックはやらない」と述べながら、国会で野党から開催の是非を問われると「私は主催者ではない」「国民の命と健康を守り、安心・安全な開催を目指す」と繰り返しました。しかし、政策の中心は、感染対策を徹底するという国民の努力、そして実施が大幅に遅れているワクチン接種だけで感染勢力を抑えようとしているように見え、本当にそれで大丈夫なのかという不安が高まりました。国民には外出自粛を求めておきながら、オリンピックで海外から万単位の選手や関係者を出迎えるという、県跨ぎもままならない中、国を跨ぐことを許すのは、どう考えてもおかしいのではないかと思います。

また、東京都では、コロナの問題が生じる以前から、医療機関統廃合など、医療政策の問題がありました。

都は支出を抑えるために、都立病院の独立行政法人化を図り、病床そして保健所も削減してきていました。最も手厚くすべき医療・福祉への支援の脆弱さが、この度のコロナでより明確に映し出されたように思います。国同様、都も具体的な方針を掲げずに都民の行動自粛を呼びかけ、都知事の「コロナも台風も同じ災害」というコメントは、私には共感できないものでした。

コロナに対応できる医療従事者をオリンピックに回し、感染者には限られたコロナ指定病院だけで対応した結果、「自宅療養」という名の、実際は「自宅放置」のような状況で、治療が施されないまま亡くなる患者が相次いでいます。首相は感染再拡大の原因を変異ウィルスの出現と述べましたが、国民の命よりもオリンピック優先の姿勢が招いたとも捉えられるのではないのでしょうか。

もし政府がオリ・パラ中止という判断をし、コロナ対策に集中していれば、感染者が必要な治療を受けられないまま自宅で亡くなるという悲惨な事態にはならなかったのではないのでしょうか。私は、自宅療養のまま亡くなった方のニュースの途中で、パラリンピックメダル取得のニュース速報が流れたときは、心が痛みました。

緊急事態宣言を繰り返したことで、飲食店など生活がかかっている人々への負担が大きくなりました。困窮している人への給付金を急ぐなど、もっとできることもあったのではないかと苦しい気持ちになります。

また、オリンピック開催前は中止や延期を求める声が多かったものの、いざ行われると選手の活躍ぶりに感動したという理由で、開催を支持する声が広がりました。学校で同世代と話していると、「コロナは大変だけど、選手は頑張ったし、開催して良かった」という声も多く、一方で感染者に十分な医療が提供されていないことには触れない人が多いと感じました。選手に対する応援の気持ちの有無ではなく、医療崩壊とも呼べる現状の中で開催されたこと、「コロナ対策よりオリンピック優先ではいけないのではないか」という私の疑問を、共有してくれる人は、決して多くありませんでした。

友人たちと社会問題を日常的な話題とすることに難しさを感じるがあります。しかし、このような状況に至った背景には、教育の問題もあることを父から聞きました。例えば、歴史の教科書は日本の植民地政策などの加害的側面はあまり大きく扱わず、原爆や空襲など、被害的な面ばかりを取り上げる傾向にあると感じます。本来、教育側は加害的面も洗いざらい伝える義務があり、国民には事実を知る権利があるのではないのでしょうか。

私は今回の東京オリ・パラ開催を通して、知らなかった多くの課題を知りました。本来は、国民の人権が尊重されて初めて成り立つはずのものが、苦しむ人が多く存在する中での開催となり、オリンピックを楽しむことは私にはできませんでした。世界に目を向ければ、同時期にアフガニスタンでの混乱など、平和とは程遠い問題が起きていました。地球温暖化の問題も待ったなしです。どのテーマも、簡単に解決できることではありません。

社会で起きていることについて、各自が幅広く知ろうとすること、人任せにせず自分にできることを行動していくこと、それが平和の継続につながり、みんなが平等に自己実現していける社会につながっていくのだと思います。政治に不満があっても、どうせ何をしても変わらないと言って何も行動しなければ、結局は現状を支持しているのと同じことになってしまいます。異なる意見の人々が、お互いの違いや不明確さを批判して終わるのではなく、納得がいくまで議論を重ねて、新しい方向性を見いだしていくことが大切ではないのでしょうか。私達は当事者です。社会を変えていくのは私たち一人ひとりの行動です。私たちはどういう世界を望んでいるのか、これからも学びながら、多くの人と共有していきたいと望んでいます。

ご清聴をありがとうございました。